

阪神新地域ビジョン（案）

令和3年10月

兵庫県阪神新地域ビジョン委員会・阪神南県民センター・阪神北県民局

目 次

第1章 新地域ビジョン策定の経緯	1
第2章 社会的潮流	1
(1) 人口減少・超高齢化	
(2) 自然の脅威	
(3) テクノロジーの進化	
(4) 世界の成長と一体化	
(5) 経済構造の変容	
(6) 価値観と行動の変化	
第3章 阪神地域の特性	6
(1) 阪神地域の人の動き	
(2) なりたち、自然・文化・歴史遺産	
(3) 許容性のある風土	
(4) 環境への配慮	
(5) 多彩な産業の集積	
(6) 阪神淡路大震災の経験を活かした災害への備え	
第4章 新地域ビジョンの実現に向けたシナリオ	13
(1) 新地域ビジョンの基本理念	
(2) 新阪神ビジョンの実現に向けた方向性	
(3) シナリオ	
第5章 新地域ビジョンの実現に向けて	38

第1章 新地域ビジョン策定の経緯

21世紀初頭の兵庫のめざす将来像を示し、中長期の県政の指針となっている「21世紀兵庫長期ビジョン」の策定から20年、改訂から10年を経て、世界も日本も大きな変革の中にあります。加えて、我が国では人口減少が進行するなど社会構造の大きな変化が進んでおり、それは本県においても例外ではありません。この大きな変化を乗り越えるためには、地域の特性にあわせて、住民が共有できる2050年の「なりたい姿」を描き、そのビジョンを地域住民、事業者、関係団体、行政等の多様な主体が共有し、実現に向けて各自の取組や施策を進めることが肝要となっていることから、この度、阪神地域における新たな地域ビジョンを策定するものです。

第2章 社会的潮流

2050年の阪神地域を考える場合において、ピンチをチャンスに変える方策を検討するため、次の6点を社会的潮流ととらえ、「現状・問題」（ピンチ）と「2050年に向けて」（チャンス）に変える方策を表します。

（1）人口減少・超高齢化

① 現状・問題点

明治時代の廃藩置県によって兵庫県が発足してからほぼ一貫して増加してきた本県の人口は、2009年を境に減少に転じ、本格的な人口減少社会に入りました。県ビジョン課の推計では、2050年の県内人口は2015年比130万人減（24%減）の423万人となっています。合計特殊出生率は1.4前後で推移しており、未婚化で出生数が減っています。

一方で、県民の平均寿命は過去50年間で10年当たり男性は2.5歳、女性は2.7歳伸びており、超高齢化が進んだため死亡数が増え、自然減が拡大しています。

また、日本全体で人口の東京一極集中が進行していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、東京以外の道府県から東京への転入超過数は、2019年の82,982人から51,857人減少し2020年は31,125人でした。その一方で、兵庫県から県外への転出超過は、引き続き状況を注視する必要があるものの、2019年の6,038人から2020年は6,865人に増加しています。

人口に関する
グラフ図挿入予定

② 2050 年に向けて

国立社会保障・人口問題研究所による将来予測では、2050 年の寿命は男性 84.02 歳、女性 90.40 歳です。医療技術の進展や健康志向の高まりにより、寿命はさらに伸びていくと考えられ、働きたい高齢者が現在よりも多くなると考えられます。

今後は、人口の流動性が高まるとともに、働き方の変化に伴って働く場所も変化を生じさせると想定されます。デジタル技術を最大限活用した「省人化」と「自動化」などで生産性（付加価値総額÷総人口）を高めることで活力を維持・向上させ、ゆとりある働き方を可能にするとともに、人々のつながりの必要性を認識させる機会をもたらします。一人当たりが利用できる社会資本の増加や自然環境への負担軽減なども相まって、時間や空間の余裕が生まれ、その結果、地域コミュニティや新たなコミュニティにゆとりをもって参加できるようになるなど、地域でのゆとりのある暮らしが実現できます。

(2) 自然の脅威

① 現状・問題点

地球の気温は過去 100 年で 0.74℃上昇しており、日本では、世界平均を上回る速さで気温が上昇傾向にあり、猛暑日や熱帯夜が顕著な増加傾向にあります。平均気温の上昇により風水害は激甚化傾向にあり、また、温暖化により未知の感染症の発生が頻発する可能性があります。

さらに、今後 30 年以内に 70～80%の確率で南海トラフ地震が発生するとの予測があります。

気温上昇関係
グラフ図挿入予定

② 2050 年に向けて

河川整備、治山ダム・砂防えん堤、防潮堤の整備、建物の耐震化などのハード対策が進み、早期避難のしくみや防災に関する人材の育成、自主防災組織の体制整備などのソフト対策が充実し、防災・減災における安全安心が進みます。

(3) テクノロジーの進化

① 現状・問題点

必要な知識や情報が共有されずに新たな価値の創出が困難となっています。その一方で、氾濫する情報のなかから必要な情報を見つけて分析する作業に、多くの労力や負担が生じています。

また、インターネットにアクセスできない人が多い年齢層があるなどの情報格差（デジタル・デバイド）が生じています。

AI・IoT 技術の革新により、多くの情報を分析し、全てのモノがつながり、知識や情報が共有される社会の形成が求められています。

② 2050 年に向けて

あらゆるモノがセンサーや無線通信などによってインターネットにつながり、相互に情報交換を行う IoT が、自動車や産業用途、家電など幅広い分野に拡大していきます。モノ同士のデータの送受信等により、離れたモノの監視や遠隔操作が可能になります。

また、テクノロジーの進化やAI・IoT 等のデジタル革新により、働き方が変わるとともに、誰もが自動翻訳や同時通訳を利用できるようになり、言語が異なってもコミュニケーションができるようになります。また、VR（仮想現実）技術やAR（拡張現実）技術の日常での使用が進むことで、現実空間（オフライン）と仮想空間（オンライン）が高度に融合したシステムが整備され、社会課題の解決や一人ひとりに最適化されたサービスの提供などが実現します。それによって情報格差（デジタル・デバイド）の解消や、ダイバーシティの実現がもたらされます。自動運転技術の進化だけでなく、空飛ぶクルマが利用できるようになるなど、移動手段での革命的な変化がもたらされます。

生命科学等の進展により病気や老化に対する治療における変革が起こり、寿命がさらに延びて、アクティブシニアがさらに増加します。

このような社会や移動手段の変革は、人々の生活スタイルや働き方にも影響を及ぼし、職と住を区別してきた「ベットタウン」の特性にも影響を与える可能性があります。

(4) 世界の成長と一体化

① 現状・問題点

世界は、アジア・アフリカを中心に今後も成長が続き、インターネットは経済活動・情報伝達・文化交流などの様々な分野において国境を超えた活動を容易にしています。人口が増加しマーケットとしての価値が増加するだけでなく、経済分野でさらなる成長が見込まれる国々がある一方で、G A F Aなど世界の巨大プラットフォームの出現によってインターネットが世界の主要産業となり、日本が誇る製造業の存在感は相対的に小さくなっています。グローバルな人の動きは拡大し、サプライチェーン、マーケット双方の観点から、今後、世界との結びつきがますます求められています。

② 2050年に向けて

明治時代以降、阪神地域は、産業活動が活発な大阪と世界との交易が進展する神戸の影響を受け、阪神間モダニズムが花開き新しい生活文化が生まれるなど、他地域から新しいものや考え方を取り入れて発展してきました。

今後は、日本の他地域のみならず、世界とつながっていくことが求められます。外国人県民との交流や多文化共生の重要性がますます高まり、世界との結びつきが一層深まる時代となっていきます。

阪神地域姉妹都市一覧
掲載予定

(5) 経済構造の変容

① 現状・問題点

世界全体では格差は縮小しているが、先進国に限ると高所得者層と中間層の格差は拡大しています。

デジタル技術の進化に伴い、ビジネスモデルの変化などによって富がもたらされる一方、いっそうの「省人化」や「自動化」が進み、労働者の減少が見込まれる。一般のオフィスワーカーのようなスキルの労働者でさえも労働分配がICTにより減少しているとの分析もあります。

また、新自由主義や株主資本主義の台頭に伴い、格差の拡大などの社会のゆがみが大きくなっています。

② 2050年に向けて

デジタル経済の進展に伴って、ビジネスモデルの変化が進む中、従来の方法にとられることなく、兵庫の産業はどのように付加価値を生み出していくかが求められています。

経済のデジタル化の発展により、①あらゆる情報がデジタル化され、②情報のやり取りに必要な追加的な費用(限界費用)がほぼゼロになり、③経済活動に必要な複数の主体間のやりとりのコストが大幅に低下することが予想されます。

このようなデジタル化の進展は、仕事をする場所の制約をなくします。初期投資を可能な限り抑制することにつながり、スタートアップに適した環境の確保など起業への追い風となります。

また、企業は、株主優先ではなく、社会貢献を使命とし、従業員・顧客・株主・地域社会などあらゆる利害関係者（ステークホルダー）に貢献するという潮流が生まれつつあり、個人が持っているスキルも価値を持つ資産と見なされるようになります。各人が自由で平等な取引を行う共有型経済や労働者たちが共同で出資・経営し働くワーカーズコープが広がりつつあります。さらにコミュニティ・ビジネスやソーシャルビジネスなど、社会の連帯を重視した取り組みを促進していくことが求められるようになり、人々は企業や地域社会など望む場所で様々な勤務形態で働くことができるようになります。

(6) 価値観と行動の変化

① 現状・問題点

2015年に国連が採択したSDGsは、将来世代のニーズを損なわずに現役世代のニーズを満たすことをめざし、2030年までに達成すべきゴールとターゲットを掲げています。将来世代や地球の未来に対する責任感を背景に、SDGsが世界の共通言語となったように、持続可能性を重視する価値観やライフスタイルが広がりを見せているが、このような考え方は、特に若い世代においてより顕著であると言われています。

このような新しい価値観の出現や社会の変化が求められていることから、今後は、固定概念や既存の社会の枠組にとらわれない考え方や行動が求められます。

② 2050年に向けて

地球環境問題を解決することが極めて重要な課題となっており、SDGsで掲げられているサステナブル志向が個人レベルまで浸透します。そのため、環境に良い選択をする「エコ」、健康と環境を重視する生活「ロハス」、倫理的に正しい消費を行う「エシカル消費」の実践を拡大させるなど、個人・企業は、環境や健康への影響を考えそれぞれの判断に基づき行動することがいっそう求められるようになっていきます。社会が絶えず変化していくことから、既存の考え方や社会の枠組にとらわれずにより良いものにしようとする柔軟性が求められるようになり、多様な価値観や個

性を認め、お互いを尊重し、多様な視点から全体の幸福を追求するような考え方や行動が求められるようになっていきます。

「所有」から「利用」に変わり、インターネット上のマッチングプラットフォーム等を通じたシェアリング・エコノミーが拡大し、その対象はモノだけでなく、スペース、移動、スキル、お金など多岐にわたっています。

また、不特定の人 (crowd=群衆) にインターネットを通じて業務委託 (sourcing) するクラウドソーシングに注目が集まっています。人材を雇用するのではなく、必要なときに必要な人材を調達するという考え方で、その対象はプログラミングやウェブサイト制作等といったIT分野中心から、企画やアイデアといった企業の中心的業務まで広がる可能性があります。終身雇用制度の衰退により雇用が流動化し、一企業にとらわれない働き方や一箇所にとらわれない暮らし方など、その自由は益々高まっています。

第3章 阪神地域の特性

(1) 阪神地域の人の動き

① 面積と人口

阪神地域の面積は、およそ 650 km²で、兵庫県全体の面積 8,400 km²の約 7.7%の面積です。また、阪神地域の人口は、約 175 万人 (令和元年 10 月 1 日現在) で、兵庫県全体の人口約 540 万人 (令和元年 10 月 1 日現在) の約 32%の人口を有しており、兵庫県のなかでも人口密度の高い地域です。

兵庫県、阪神人口比較
グラフ図挿入予定

② ファミリー層の転入と若者層の転出超過

阪神地域における転入、転出の特徴としては、30代や40代のファミリー層の転入が多く、20代の若者層が転出超過となっていることがあげられます。これは、地域内に数多くある大学等を卒業し、就職するために移住する若者が転出する一方で、子育てのために、阪神地域に移住してくる家族層が多いためではないかと考えられます。

③ 健康寿命県内 1 位

また、阪神地域は、健康寿命（日常生活動作が自立している期間の平均）が長く、特に阪神北地域は、2015 年の健康寿命算定結果において、男女とも県内 1 位となっています。

④ 今後の人口減少

今後の人口の推移について、県ビジョン課の推計では、2050 年の阪神地域の人口は 2020 年に比べおよそ 140 万人、約 16%減少すると見込まれています。

(2) なりたち、自然・文化・歴史遺産

① 阪神地域の地形

大阪と神戸の間に位置する阪神地域は、兵庫県の南東部に位置し、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、三田市及び猪名川町の 7 市 1 町からなる地域となっています。

この地域は、東は大阪府、西は神戸市及び北播磨、東は丹波、南は大阪湾に面しています。

地域内の地形については、北部に六甲・北摂連山、南部に大阪湾沿岸部を有し、武庫川水系・猪名川水系の本支流が流れ、北西部に三田盆地、南部には甲子園浜、御前浜（香櫨園浜）、芦屋浜などがあり、利便性の高い生活環境を生み出す平野に加えて、河川や浜辺、山林などの多様な自然環境が住民の生活や心に潤いをもたらしています。

兵庫県地形図
挿入予定

② 近世までの発展の軌跡

明治の廃藩置県以前、阪神地域は、畿内に属する旧摂津国の一部でした。律令時代は山陽道が走り、尼崎は京や奈良の巨大社寺を造営する材木を西国から運ぶ中継港として栄えました。江戸時代には山陽道は西国街道と言われるようになりましたが、街道沿いの昆陽宿、西宮宿が宿場町として栄え、また、尼崎藩の城下町（阪神電鉄出屋敷駅東側から阪神電鉄大物駅西側のあたり）、三田藩の城下町（県立有馬高等学校、市立三田小学校周辺）としても栄えました。

この地域は古くから政治、経済、文化などの先進地であったため、歴史遺産も数多くあり、古くは、廣田神社（神功皇后の創建と伝えられている。）や中山寺（聖徳太子の創建と伝えられている。）を始めとした由緒ある神社仏閣、清酒発祥の地であり下り酒が生んだ文化、俳諧や人形浄瑠璃、能舞台など長い歴史を持つ文化が蓄積されています。

また、地域内には二つの日本遺産（1300年つづく日本の終活の旅～西国三十三所観音巡礼～（大本山中山寺）、「伊丹諸白」と「灘の生一本」ー下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷ー）があります。

酒造家たちは江戸積み酒造で築いた富をこの地域の発展のために、芸術や教育、建築に注ぎました。そうった文化へのまなざしは、後述する「阪神間モダニズム」の端緒ともなり、都市の骨格形成の一助となり、現代に至るまで地域の発展の一翼を担い続けています。

③ 近代の発展の軌跡

明治時代以降、港湾都市として発展する神戸と、上方の伝統文化を継承しつつ更に発展していく大阪との間に位置することから、多くの人々が移住し続け、都市化が進展するとともに、経済も発展を遂げてきました。

近代化政策を背景に、官営鉄道東海道本線や阪鶴鉄道（主に現在の JR 福知山線を運行）などが営業を開始し、その後、阪神電気鉄道株が神戸[三宮]ー大阪[出入橋]間、箕面有馬電気軌道株（現 阪急電鉄株。以下「阪急電鉄」という。）が宝塚本線[梅田ー宝塚]及び箕面線[石橋ー箕面]の営業を相次いで開始しました。

阪急電鉄は宝塚唱歌隊（後の宝塚歌劇団）を結成し、宝塚歌劇や宝塚温泉などに乗客を誘導するとともに、沿線で住宅開発を進めました。

また、阪神沿線・阪急神戸線沿線は、西宮七園（住宅地も含まれています。）、甲子園娯楽場（後の甲子園阪神パーク）、甲子園ホテルなどのある一大リゾート地でもあり、資産家や文化人、外国人などの住宅や別荘の建築が進んだことも一因となり、和洋折衷のモダンな生活スタイルや、ゴルフやテニスのような近代スポーツの広まりも見られ、「阪神間モダニズム」に代表される特徴的な文化を生み出しました。

そして、工業地帯としても発展するなかで、多数のサラリーマンの移住が進み、これらの人々は「阪神間モダニズム」の新たな担い手となり、阪神地域はわが国のライフスタイルを先導する地域として、独自性を発揮することとなりました。

現在は、特色のある博物館、美術館やホール、スポーツ施設もあり、地域と一体となった芸術活動や、スポーツ活動が展開されています。こういった様々な地域資源としての強みが、阪神地域が住みたい街に選ばれる要因となっています。

阪神間モダニズム
イメージ写真等

阪神甲子園球場等
イメージ写真

(3) 許容性のある風土

① 許容性がある地域

阪神地域は、その歴史を振り返ってみると、他地域の日本人や外国人が流入し、そういった人々が持っていた文化－異国文化に代表される他文化－を柔軟に受け入れて発展してきた地域であり、新しい考え方や文化、多様な活動をする人たちを寛容に受入れることができる許容性がある地域です。

② 高等教育機関の集積と変革の姿勢

現在は、数多くの大学や短期大学といった高等教育機関が集積するなど、知が集積する県内有数の地域であり、そこに通学する学生がいることから若者が多い地域でもあります。また、先駆的な芸術家、社会活動、起業に向けた機運の高さに見られるように、変革の姿勢がある地域でもあります。

③ 地域活動や生活における自由度が高く住みやすい地域

大阪と神戸の間に位置する阪神地域は、南部には都市型住宅地、北部には郊外型ニュータウンが形成され、多様で良好な住宅地を形成しています。21世紀兵庫長期ビジョン（2001年策定、2011年改訂）が描く社会像の評価指標である「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査では、「住んでいる地域への愛着や誇りを感じる」という人の割合や、「今の生活に満足している」という人の割合、「住んでいる地域にこれからも住み続けたい」という人の割合は、県内の他地域と比べ高い割合で推移し、全県平均の割合を上回っています。この調査結果からみると、阪神地域は自分の活動や生活における自由度が相対的に高い地域であるとも言えます。

④ 少子高齢化

一方、核家族化や就労環境の変化により、子育てに関する不安を感じる家庭が増えており、少子高齢化問題を深刻化させています。

高齢化率は上昇しているものの、健康寿命が高く、活動的なアクティブシニアも多いです。もはや「65歳以上」を高齢化と定義する必要がない社会となっており、生涯学習などの生きがいがづくり、地域での子育て支援、高齢者の見守りなど、地域社会の担い手としての社会的役割が期待されている。その一方で、前述の「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査では、「ボランティアなど社会のために活動している」、「してみたい」という人の割合が、県内の他地域に比べて低くなっており、多様な生き方を選ぶことができることや、多様な人材が活躍する場の形成が望まれます。

⑤ 仕事に対する意識

県民意識調査では、「理想的な仕事」として、「自分にとって楽しい仕事」「自分の専門知識や能力を活かせる仕事」「世の中のためになる仕事」をあげる人が、県内他地域より高い結果になっています。

⑥ 地域に根付く芸術文化

阪神間モダニズム時代の先駆的なアートである具体美術、若者を中心に運営される音楽フェス、アートイベント、ダンスや先駆的な小劇場演劇、市民オペラや交響楽団など地域に自らがつくる先駆的なアートなど芸術文化の気風が広がっている地域です。盛んなオープンガーデンや手工芸など、生活の一部にアートが根付いており、県民意識調査では、県下他地域に比べ、文化・芸術活動、地域のイベントへの満足度が高い結果になっています。

このような阪神地域の持つ許容性をいかし、多様な主体がいろいろな分野で一層活躍することが求められます。

(4) 環境への配慮

① 環境問題と尼崎臨海地域における環境共生型のまちづくり

高度経済成長期の産業活動や大規模開発に伴い、大気汚染や水質汚濁、自然環境破壊など、様々な環境問題に直面したが、公害対策や環境保全に取り組み、改善に成果を上げてきました。また、地球温暖化の影響は、農業、林業、水産業、水環境・水資源、自然生態系、自然災害・沿岸域、都市生活など、あらゆる分野に影響を及ぼしています。

阪神南地域では、尼崎臨海地域を魅力と活力あるまちに再生するため、陸域での環境負荷を少なくするとともに、ゆとりと潤いをもたらす水と緑豊かな自然環境の創出による環境共生型のまちづくりをめざす「尼崎 21 世紀の森構想」に取り組んできました。

尼崎臨海地域
イメージ写真等

北摂里山地域
イメージ写真等

③ 里山の保全と北摂地域の活性化

阪神北地域では、交通網が充実したニュータウンが多く開発されてきましたが、一方で、森林面積が約 6 割を占めています。森林の約 9 割が天然林であり、今なお、歴史・文化や生物多様性などを保つ里山が数多く残されていることから、北摂里山の持続的な保全を図り、北摂地域の活性化につなげるため、天然記念物の保全・管理や環境学習の支援などを担っている地域団体等とも連携しながら、「北摂里山博物館（地域まるごとミュージアム）構想」を推進してきました。

④ 自然環境保全活動のデジタル化

しかし、少子高齢化により、環境保全活動団体などの担い手の不足、空き家や空き地の増加による環境の悪化などが進むことで、このような自然環境保全活動に影響を与えています。

都市に近い里浜や北摂里山のような阪神地域固有の自然環境を守り、地域環境の恵みを持続的に享受していくためには、AI や IoT に代表されるデジタル化を活用した CO2 削減への取組と脱炭素社会への前進が必要です。

⑤ 持続可能社会の実現の必要性

持続可能な社会の実現は、ESG 投資（財務情報だけでなく、環境(Environment)・社会(Social)・ガバナンス(Governance)の要素も考慮した投資）という側面からも推進する必要があります。

(5) 多彩な産業の集積

① 多彩な産業

阪神地域では、地域特性に応じた多彩な産業が展開されています。

明治時代には、産業活動が盛んな大阪と、世界等の交易が進展する神戸の間にあるという地理的な要因から、尼崎の臨海部を中心に多数の企業が立地し、日本を支える工業地域として発展しました（阪神工業地帯は日本の三大工業地帯の一つ。）。

現在では、ものづくり産業や起業が活発であり、商店街を地域住民が日常的に利用するなど、商工業が盛んです。

② 豊かな農畜林産物

阪神地域の北部では、都市部での都市農業や、都市部（消費地）との近接性をいかした都市近郊農業が行われており、葉物野菜やいちじく・北摂栗、三田牛、原木椎茸など歴史と伝統のある農畜林産物を共有しています。市民農園や観光農園などもあり、消費者が農にふれあえる取組や阪神地域の農産物を食品加工するなど、「農」と「食」に関わるや活動拠点をアトラクションとし、地域全体をテーマパークに見立てる「阪神アグリパーク構想」を推進しています。

都市近郊農業
イメージ写真等

農畜林産物等
イメージ写真

③ 銘醸の集積

また、令和2年6月には、『「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷』が日本遺産として文化庁に認定されました。江戸時代、清酒（澄み酒）発祥の地である伊丹や、伊丹から酒造りを導入した灘五郷（神戸市、西宮市）で生産された清酒が、酒輸送専用の船（樽廻船）により下り酒として江戸へ届けられました。現在では、灘五郷は日本最大の清酒酒造地帯であり、全国の清酒生産量のうち4分の1程度を兵庫県が占めています。伊丹や灘五郷（灘五郷のうち西宮郷及び今津郷）のような銘醸地が集積していることも阪神地域の特色です。

銘醸地等
イメージ写真

④ 物流と産業を支える交通

平成30年には大阪北部から神戸市まで延伸した第二名神高速道路の開通し、川西市内にインターチェンジが開設され、阪神高速湾岸線とあわせ、物流の効率化や地域産業の活性化を支えています。

（6）阪神淡路大震災の経験を活かした災害への備え

① 水害への備え

武庫川は「摂津の人取り川」と言われ、古くから氾濫を繰り返し、大洪水のたびに自由奔放に流れを変えた暴れ川で、幾多の水害をもたらしました。そのため、江戸時代中期から、数多くの治山治水工事が行われてきました。武庫川の支川である逆瀬川は兵庫県が初の砂防工事をした「兵庫の砂防発祥の地」とされており、大正時代には武庫川の大改修が行われるなど、継続的に災害対策を行ってきました。近年では、阪神・淡路大震災の被災地として甚大な被害を経験しているが、地震だけでなく、臨海部における津波や高潮、武庫川水系や猪名川水系などの河川の氾濫など今後起こりうる大災害に備える必要があります。また、住民の自主的な防災に関する意識が高い地域です。

② 南海トラフ地震への地域における備え

近年、地球温暖化の影響により豪雨が多発する傾向にあることや、今後南海トラフ地震の発生も想定されることから、地域が一体となった住民による自主防災力のさらなる向上が望まれます。

- 案1：みんなでもにつくる「住んでよし、働いてよし、集ってよし」
 案2：共創するまちの実現～住んでよし、働いてよし、集ってよし～
 案3：コ・クリエーションなまちの実現～みんなでもにつくる住んでよし、働いてよし、集ってよし～
 案4：コ・クリエーションな阪神地域を目指して～住んでよし、働いてよし、集ってよし～

第4章 新地域ビジョンの実現に向けたシナリオ

(1) 新地域ビジョンの基本理念

「コ・クリエーションなまちの実現～住んでよし、働いてよし、^{つど}集ってよし～」

阪神地域は、第3章で述べたように、新しい考え方や文化などを寛容に受け入れることができるような許容性のある地域です。そして、この許容性があったからこそ、明治時代以降に外国の文化なども受け入れ、阪神間モダニズムという多様でモダンな芸術文化、魅力あるライフスタイルを生み出すことができました。

また、このような文化的潮流を生み出すことができたのは、一個人の力によるものではありません。地域外から移住してきた人々がもたらした文化を、もともと地域で暮らしていた人々も含め、地域全体で受け入れ、様々な人々が活動し、相互に影響を与え、発展させてきたものです。

このような観点から、阪神地域は、古くから、地域の人々が協働し、新たな文化を共に創りだしてきた地域ということが出来ます。

これまでの地域の歴史をいかし、2050年の阪神地域のビジョンを実現させるためには、さまざまな人々がそれぞれの環境を認め、できる人ができることに取り組み、重層的につながることにより、豊かな暮らしと地域の活力を**創造**する「コ・クリエーションなまちの実現」が肝要です（単に**造る**ことをその目的とするのではなく、多様な立場の人々が対話しながら新しい価値を共に**創る**ことがコ・クリエーションの発想です）。

そして、どのような観点でコ・クリエーションすればよいのか。3つの「よし」の視点に着目し、社会的潮流や阪神地域の特性を踏まえ、県民の皆さんとの多様な意見交換を重ねた結果をもとに上記の基本理念を掲げました。

○住んでよし・・・誰もが自然と参加できるコミュニティがあり、関係性を維持しながら、地域住民が住み続けたいと思えるまちにする。

[暮らしの魅力をコ・クリエイト]

○働いてよし・・・多彩な産業、豊富な地域資源、大阪や神戸へのアクセスの良さ、多数ある高等教育機関、地域と結びついたクリエイティブな活動などの地域の強みをいかし、誰もがいつでもどこでも学べ、働きやすく、起業もしやすい環境をつくる。

[しごとの魅力をコ・クリエイト]

○集ってよし・・・デジタル技術を活用し、都市、里山、里浜に近い自然の魅力や多様な芸術文化を活かし、地域資源とともに魅力のある時間や空間をつくる。

[交流の魅力をコ・クリエイト]

(2) 新阪神ビジョンの実現に向けた方向性

基本理念である、「コ・クリエーションなまちの実現～住んでよし、働いてよし、集ってよし～」にあたり、表現の観点から、4つの方向性に分けました。

一つめは“個”の豊かさの創出、コ・クリエーションのもととなる「自分らしいスタイルが実現できるまち」、二つめは、阪神の先人たちが積み上げてきた自然、歴史、文化を学び、未来に繋げる「自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち」、三つめは、人とのつながりで豊かになった個が相乗効果を生み、より豊かな地域に発展する「みんながつながる、やさしいまち」、四つめは、歴史的な蓄積や阪神間の資源を介して賑わいという形で阪神間らしく発現する「にぎわいのあるまち」として記載しました。

そして、2050年に目指したい具体的な姿をそれぞれの方向性の役割や特色によって明確に創造するため、さらに18のシナリオに分けています。

I 自分らしいスタイルが実現できるまち

番号	シナリオタイトル
1	地域と趣味と仕事が重なる暮らし
2	いつからでも誰でもスタートアップ
3	多様な人々が住みやすいまち
4	多文化共生で人々がいきいきと暮らせるまち

II 自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち

番号	シナリオタイトル
5	未来まで続く花と緑と里山
6	みんなが憩う阪神なぎさ回廊
7	再発見で魅了する「阪神間モダニズム」
8	生涯の学びと次世代につなぐ阪神文化
9	地域で循環するエネルギー

III みんながつながる、やさしいまち

番号	シナリオタイトル
10	世代を超えてつながるまち
11	自分にあった“つながり”に参加できるまち
12	みんなで進める防災・減災
13	いきいき健康100年人生

IV にぎわいのあるまち

番号	シナリオタイトル
14	アートによるクリエイティブな環境づくり
15	訪れたい訪れやすい阪神地域ツーリズム
16	多彩な農と美味しい食
17	まちなかのにぎわいを創出する
18	みんなで楽しむスポーツ

I 自分らしいスタイルが実現できるまち

都市に近く自然にも近い、利便性と自然のバランスのとれた地域で、ICTやAIなどの進化する技術を活用しながら、起業やまちづくりの活動、職住近接などを通じて、わくわく感や面白いことができる、挑戦できる地域、時間や空間にゆとりを持った多様な暮らしの実現と、ノーマライゼーションやジェンダーフリーの理念のもと、多様な人々が自分らしいスタイルを実現できるまちを目指します。

シナリオ1「地域と趣味としごとが重なる暮らし」

現状の課題は、柔軟な働き方に対する勤務環境が整備されていないことですが、テレワーク環境の整備など、業務環境の整備の推進に取り組み、望むような働き方を選び、地域活動や趣味を楽しむことができる暮らしの実現を目指します。

シナリオ2「いつからでも誰でもスタートアップ」

現状の課題は、社会人がスキルを学び直せる機会が少ないことですが、高度な専門的知識を習得する機会が広がるような取組を行い、起業・複業・転職がしやすくスタートアップを支援するまちを目指します。

シナリオ3「多様な人々が住みやすいまち」

現状の課題は、地域活動の担い手不足にも関わらず、意欲のあるシニア・女性の活用ができておらず、また、性的マイノリティへの理解が不足していることです。そこで、ライフステージに応じた多様な生き方が選択・実現できる機会づくりに取り組み、シニアや女性、障害者の方が地域や企業で能力を発揮し、多様な人々が住みやすいまちを目指します。

シナリオ4「多文化共生で人々がいきいきと暮らせるまち」

現状の課題は、外国人の増加でコミュニティが変容していることですが、地域で暮らす人々が日本や外国の文化を学び、異文化交流をすすめる取組を行い、あらゆる人がコミュニティで自分らしく生活することを目指します。

II 自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち

北摂の里山、海岸部の阪神なぎさ回廊、「阪神間モダニズム」に代表されるこの地域に息づく文化や歴史などの様々な地域資源をまもり、次世代へ継承させるとともに、脱炭素社会への取組をすすめます。豊かな地域資源を地域住民自身も体感することによって、こころ豊かで、地域に愛着を持った人を育て、次世代への継承を図ります。

シナリオ5「未来まで続く花と緑と里山」

現状の課題は、北摂の里山保全の担い手不足により次世代への継承が困難になっていること等ですが、里山の保全活動の強化・省力化やファンの獲得・拡大等に取り組み、里山や景観の保全と人々の定住・移住・交流が進むことを目指します。

シナリオ6「みんなが憩う阪神なぎさ回廊」

現状の課題は、阪神なぎさ回廊の知名度が低いことですが、海岸部の親水空間が知られるような情報発信や、サイクリングやウォーキングに必要な整備等に取り組み、海岸部の親水空間が阪神地域内外の人々の憩いの場、レクリエーションの場として賑わうことを目指します。

シナリオ7「再発見で魅了する「阪神間モダニズム」

現状の課題は、阪神間モダニズムの知名度が低く、阪神を支える歴史、文化、芸術として捉えられていないことですが、幅広い人に知ってもらえるよう、学びの場づくりやイベントの実施、建築物などの継承に取り組み、阪神間モダニズムの保存と継承、発展を目指します。

シナリオ8「生涯の学びと次世代につなぐ阪神文化」

現状の課題は、地域の伝統や継承されてきた文化についての認知が希薄になっていることですが、学びの機会をつくり、専門的な人材を育てることに取り組み、学び得たことを周りの人たちに伝え、地域への理解を深め、子どもが地元で愛着を持ち、地域の伝統や文化が次世代に継承されていくことを目指します。

シナリオ9「地域で循環するエネルギー」

現状の課題は、脱炭素社会に向けての意識がようやく高まりつつあるものの、気候変動の影響が顕著になっていることですが、太陽光発電、小水力発電、バイオマス発電など再生可能エネルギーの導入拡大に取り組み、エネルギーを地域内で循環し、脱炭素の進展を目指します。

Ⅲ みんながつながる、やさしいまち

都市部特有の近所付き合いの希薄化、少子高齢化が進む中、自身が望むようなつながりが持てたり、地域での子育てのサポートや高齢者の見守りといった「向こう三軒両隣」的な発想を醸成したり、既成の概念にとらわれない新しいスタイルのコミュニティを形成しながら、防災・減災への取組につなげます。

シナリオ10「世代を超えてつながるまち」

現状の課題は、若い世代の転出と高齢化に伴い、オールドニュータウン化が進んでいることですが、転出転入を促進してまちの若返りをすすめ、活性化するような取組を行い、ゆとりがあり、成長できる環境で誰もが望んだくらしができるようなまちを目指します。

シナリオ11「自分にあつた”つながり”に参加できるまち」

現状の課題は、ライフスタイルの変化や多様化により人と人とのつながりが希薄になっていることですが、様々なつながり方ができる仕組みづくりに取り組み、自分にあつたつながりに参加でき、人々が地域に愛着を持てるようなまちを目指します。

シナリオ12「みんなで進める防災・減災」

現状の課題は、南海トラフ巨大地震や温暖化の進行に伴う豪雨・台風災害の激甚化など、甚大な災害が発生するリスクが高まっていることですが、ハード対策を整備するとともに、ソフト対策を外国人居住者も含めた住民と一体となって取り組み、誰一人取り残さない防災・減災対策が整っているまちを目指します。

シナリオ13「いきいき健康100年人生」

現状の課題は、認知症やフレイル（加齢による心身の虚弱化）への理解が迫いついておらず、予防の取組が着手したばかりであることですが、予防や早期発見に取り組み、健康寿命を延伸させ、末永く自分らしく暮らすことができるまちを目指します。

IV にぎわいのあるまち

宝塚大劇場や甲子園球場のような多様なアメニティ施設や、「伊丹諸白」「灘の生一本」などの日本遺産、豊富な地域資源の磨き直し、おいしい地元産の食により、外国人も含む人々の交流の促進を図り、いっそうにぎわいのあるまちを目指します。

シナリオ14「アートによるクリエイティブな環境づくり」

現状の課題は、多彩で特色のあるアートイベントや舞台芸術が開催されているものの認知度が低く、住民に地域資源として認識されていないことですが、アートイベントを開催できる場づくりに取り組み、身の回りに芸術があり、アートの魅力でクリエイターが集まり、アートの魅力あふれるまちを目指します。

シナリオ15「訪れたい訪れやすい阪神地域ツーリズム」

現状の課題は、阪神地域の多様な魅力を活かしきれておらず、地域内外、国外にも広く知ってもらう必要がありますが、地域住民だけでなく国内外の人々に来てもらえるように情報発信に組み込み、いつも誰かが訪れるにぎわいのあるまちを目指します。

シナリオ16「多彩な農と美味しい食」

現状の課題は、阪神地域こだわりの食材やブランドを維持するための継承者や担い手が不足していることですが、農業希望者と農地を気軽に組み合わせる仕組みづくり、農業やブランドが維持できる仕組みづくりに取り組み、「メイド・イン阪神」の食材がブランドとして確立して人気となり、伝統の味が継承されるよう目指します。

シナリオ17「まちなかのにぎわいを創出する」

現状の課題は、空き店舗が増えている、まちなかのオープンスペースや街路などが有効活用されていないなど、まちの活力が損なわれていることですが、空き店舗の利用促進やまちなか資源の有効活用流に組み込み、発展した阪神がにぎわい、交流やイベントなどが継続されることを目指します。

シナリオ18「みんなで楽しむスポーツ」

現状の課題は、阪神地域でスポーツを楽しむコミュニティが活発ではないことですが、スポーツに関心を持ち、スポーツをする人や観戦する人が増えるよう取り組み、自主的なスポーツ活動が拡がり、住民にとってスポーツが生活の一部になることを目指します。

(3) シナリオ

社会的潮流の速さとポストコロナ社会のなかで、およそ30年後の2050年を展望することは、容易なことではありません。この期間を、「課題」、「将来への取組」、「2030年頃の間画像」と段階的に分け、最終的に「2050年にめざしたい姿」を描きます。各段階を経るうえで、「これをしないと進まない」というクリティカルパス（重大な経路）を挙げています。

シナリオ項目に関する現状を記載しました。

シナリオ
1 自分らしいスタイルが実現できるまち
地域と趣味と仕事が重なる暮らし

- 大阪や神戸のベッドタウンでも、農村部の複数の市が毎年「住みやすいまち」ランキングに名を連ねています。新型コロナウイルス感染拡大防止対策で、業務のデジタル化が進行し、働く場所や働き方が変化した、「住みたいまち」は住みたいだけではない特色を顕在化しつつあります。
- 働く場所や働き方が変化するによりコミュニティへの関わり方や通勤時間を考える機会になります。

住みやすいまちランキング（関西・総合）の順位 20位以内でランキングされた市町村の順位

2017	2018	2019	2020	2021
1位 西宮北口				
2位 梶田				
3位 なんば	3位 神戸三宮	3位 神戸三宮	3位 神戸三宮	3位 神戸三宮
4位 摂川	6位 摂川	5位 摂川	6位 摂川	6位 摂川
11位 宝塚	12位 宝塚	11位 宝塚	13位 宝塚	12位 宝塚
12位 岸和田	17位 岸和田	17位 岸和田	17位 岸和田	13位 岸和田
	20位 西宮	20位 西宮	19位 尼崎	
			20位 西宮	

出典：リクルート suumo 調査

主に阪神地域の住民が行動する取組について記載していますので、主語を省略している場合の行動主体は阪神地域の住民とします。



2030年頃の間画像を目指すために現時点から2030年までに取り組むことを記載する項目です。

「みんなの声」「生産者の声」「外国人の方々の声」「地域デザイン会議の意見」等は、ヒアリング、アンケート調査、ビジョンを語る会、地域デザイン会議等により聴取した県民の方々の意見を記載しました。

第5章 新地域ビジョンの実現に向けて

新地域ビジョンの実現は、阪神地域の住民、企業、大学、行政、また地域問題を掘り下げ、地域活動を支援し、行政と住民をつなぐNPO法人もこのビジョンを共有し、連携して実現に向けて取り組みます。阪神地域の175万人のいいね！を目指しましょう。

(1) 阪神地域の住民

新地域ビジョンに取り組む人の輪を広げること、積極的な活動と色んなコミュニティへ参加することや、互いを理解し受け入れる環境と場づくりを行うこと、また新たな住民の受け入れを支援する意識を持つことを実践します。

(2) 企業

在宅ワーク環境や働く人々の生活スタイルに合わせた柔軟な勤務条件を整備すること、環境保全のための脱炭素社会の実現へ取り組み、社員が活動することも含めた地域活動への理解とその地域活動への参画などですが、行政と連携し、協働でこの取り組みを進めることが肝要です。

(3) 大学

高等教育機関として、県民が高度な専門的知識を習得する機会の提供や、地域と一緒にワークショップを開催し、社会人や子どもが学び合う機会を広げ、地域づくりへの学術的支援や人材養成支援を行います。

(4) 行政

阪神地域の住民の協働と参画を支援し、人材育成を支援します。

連携を必要とする人たちをつなぐコーディネート機能を向上し、情報を必要とする人々へ情報と交流機会を提供するプラットフォーム機能を向上させ、阪神地域の住民や地域の活動を支援します。

